

新約聖書 ヨハネによる福音書 6章 56節—69節（新共同訳）

⁵⁶ わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者は、いつもわたしの内におり、わたしもまたいつもその人の内にいる。⁵⁷ 生きておられる父がわたしをお遣わしになり、またわたしが父によって生きるように、わたしを食べる者もわたしによって生きる。⁵⁸ これは天から降って来たパンである。先祖が食べたのに死んでしまったようなものとは違う。このパンを食べる者は永遠に生きる。」⁵⁹ これらは、イエスがカファルナウムの会堂で教えていたときに話されたことである。

⁶⁰ ところで、弟子たちの多くの者はこれを聞いて言った。「実にひどい話だ。だれが、こんな話を聞いていられようか。」⁶¹ イエスは、弟子たちがこのことについてつぶやいているのに気づいて言われた。「あなたがたはこのことにつまずくのか。⁶² それでは、人の子がもといた所に上るのを見るならば……。⁶³ 命を与えるのは“霊”である。肉は何の役にも立たない。わたしがあなたがたに話した言葉は霊であり、命である。⁶⁴ しかし、あなたがたのうちには信じない者たちもいる。」イエスは最初から、信じない者たちがだれであるか、また、御自分を裏切る者がだれであるかを知っておられたのである。⁶⁵ そして、言われた。「こういうわけで、わたしはあなたがたに、『父からお許しがなければ、だれもわたしのもとに来ることはできない』と言ったのだ。」

⁶⁶ このために、弟子たちの多くが離れ去り、もはやイエスと共に歩まなくなった。⁶⁷ そこで、イエスは十二人に、「あなたがたも離れて行きたいか」と言われた。⁶⁸ シモン・ペトロが答えた。「主よ、わたしたちはだれのところへ行きますでしょうか。あなたは永遠の命の言葉を持っておられます。⁶⁹ あなたこそ神の聖者であると、わたしたちは信じ、また知っています。」

※第1朗読と第2朗読は末尾に掲載

説教「選ぶ」

人は、食べ物がなければ生きていくことができません。人間の食べることへの欲求は、生の根源的な欲求です。

しかしまた、人は食べることだけでは満たされない存在でもあります。先進国における自殺率の高さも、それを表していると言えるでしょう。

そんな私たち人間に、イエスは、こう語りかけます。

「わたしが命のパンである。わたしのもとに来る者は決して飢えることがなく、わたしを信じる者は決して渴くことがない」（ヨハネ 6:35）。

私たちには、マタイ、マルコ、ルカ、ヨハネの四つの福音書が与えられています。

ヨハネ福音書には、マタイ福音書やルカ福音書と違って、イエス誕生にまつわる、いわゆるクリスマスの出来事は記されていません。

「初めに言があった。言は神と共にあった。言は神であった。この言は、初めに神と共にあった」から始まるヨハネ福音書には、イエスの生まれた場面や、家系図がなく、天に属するもの、神の子であるイエスが強調されています。

ヨハネ福音書には、イエスの誕生にまつわるクリスマスの話は記されていませんが、イエスが「天から降って来たパン」であるというのは、間接的にイエスの誕生を表していると言えるでしょう。すなわち、神の子である方がこの地上にやって来られた、主イエスが神の子、救い主として、天からこの世に到来したということです。

この地上の身体を養う食物は、地上から生じる食物です。他方、天に属するいのちを養う食物は、天に属するものです。天に属するいのちは、天から降ってこられたパンであるイエスご自身によって養われます。主イエス・キリストは、地上に住む人間を養うために天から降ってこられました。

人々は、イエスが五千人に与えたパンのしるしには驚嘆し歓迎しましたが、イエスご自身が「天から降って来たパン」であるというイエスの言葉は拒絶します。

イエスはこの御言葉を通して、福音のもっとも深い部分に触れ、救いの奥義を語りましたが、弟子たちの多くはこれを理解できませんでした。それは彼らが霊ではなく、肉に属するものであったからです。ヨハネ福音書はここで、霊と肉との対立を示唆します。

「肉」とは神とのつながりのない人間のあり方を指し、「霊」とは神とのつながりを指すのです。イエスの生涯と言葉のすべては、この神とのつながりこそが人を生かすものであることを示しています。

イエスはこう言いました。「命を与えるのは“霊”である。肉は何の役にも立たない」(ヨハネ 6:63)。

イエスの言葉は霊の次元の言葉であるので、イエスのわざや言葉を理解するのに肉は何の役にも立ちません(ヨハネ 6:63)。「わたしがあなたがたに話した言葉は霊であり、命である」(ヨハネ 6:63)とは、このイエスの言葉が、霊の次元でのみ理解できるものであると同時に、理解することで命を受け取ることができるという意味です。

「わたしの肉を食べ、わたしの血を飲」めというイエスの言葉（ヨハネ 6:56）の本質が理解できず誤解した多くの人々が、イエスに失望あるいは憤慨して去って行きました。それまでは、群衆から熱狂的に支持されていたイエスの周囲は寂しいものになりました。

この場面からは、コリントの信徒への手紙 — 1章 25節に記されているこんな言葉が思い起こされます。「神の愚かさは人よりも賢く、神の弱さは人よりも強いからです」。

イエスが、残った十二弟子たちに「あなたがたも離れて行きたいか」と言った時（ヨハネ 6:67）、ペトロはこう答えました。

「主よ、わたしたちはだれのところへ行きましょうか。あなたは永遠の命の言葉を持っておられます。あなたこそ神の聖者であると、わたしたちは信じ、また知っています」（ヨハネ 6:68-69）。

さて、8月も後半になりました。

人生を生きていく中で、苦しいことや、不安や恐れや、後悔の念はつきものです。

自分自身や、身近な人の死への恐れや不安などもあるでしょう。

肉体としては限りあるこの人生を、私たちは、どのようにして生きていけばいいのでしょうか。

それは、「覚悟を決めて、生と死を越えて生きること」だと感じます。

人間は、いつか必ず肉体の死を迎えます。

私たちは皆、神と共にいかにして死ぬかということに、向き合わねばならない時がきます。

神と共にいかにして死ぬかというその向き合いが、喜びに満ちたものとなるように、日々、感謝のうちに祈りつつ、心を新たにして生きていきましょう。

私たちは、この地上に共に生きる喜びを胸に、隣人を愛し大切にしながら、感謝のうちに共に歩いていきましょう。

***** 説教ここまで *****

旧約聖書 ヨシュア記 24章1節—2節aと14節—18節（新共同訳）

¹ ヨシュアは、イスラエルの全部族をシケムに集め、イスラエルの長老、長、裁判人、役人を呼び寄せた。彼らが神の御前に進み出ると、² ヨシュアは民全員に告げた。

¹⁴ あなたたちはだから、主を畏れ、真心を込め真実をもって彼に仕え、あなたたちの先祖が川の向こう側やエジプトで仕えていた神々を除き去って、主に仕えなさい。¹⁵ もし主に仕えたくないというならば、川の向こう側にいたあなたたちの先祖が仕えていた神々でも、あるいは今、あなたたちが住んでいる土地のアモリ人の神々でも、仕えたいと思うものを、今日、自分で選びなさい。ただし、わたしとわたしの家は主に仕えます。」

¹⁶ 民は答えた。

「主を捨てて、ほかの神々に仕えることなど、するはずがありません。¹⁷ わたしたちの神、主は、わたしたちとわたしたちの先祖を、奴隷にされていたエジプトの国から導き上り、わたしたちの目の前で数々の大きな奇跡を行い、わたしたちの行く先々で、またわたしたちが通って来たすべての民の中で、わたしたちを守ってくださった方です。¹⁸ 主はまた、この土地に住んでいたアモリ人をはじめ、すべての民をわたしたちのために追い払って下さいました。わたしたちも主に仕えます。この方こそ、わたしたちの神です。」

新約聖書 エフェソの信徒への手紙 6章10節—20節（新共同訳）

¹⁰ 最後に言う。主に依り頼み、その偉大な力によって強くなりなさい。¹¹ 悪魔の策略に対抗して立つことができるように、神の武具を身に着けなさい。¹² わたしたちの戦いは、血肉を相手にするものではなく、支配と権威、暗闇の世界の支配者、天にいる悪の諸霊を相手にするものなのです。¹³ だから、邪悪な日によく抵抗し、すべてを成し遂げて、しっかりと立つことができるように、神の武具を身に着けなさい。¹⁴ 立って、真理を帯として腰に締め、正義を胸当てとして着け、¹⁵ 平和の福音を告げる準備を履物としなさい。¹⁶ なおその上に、信仰を盾として取りなさい。それによって、悪い者の放つ火の矢をことごとく消すことができるのです。¹⁷ また、救いを兜としてかぶり、霊の剣、すなわち神の言葉を取りなさい。¹⁸ どのような時にも、“霊”に助けられて祈り、願い求め、すべての聖なる者たちのために、絶えず目を覚まして根気よく祈り続けなさい。¹⁹ また、わたしが適切な言葉を用いて話し、福音の神秘を大胆に示すことができるように、わたしのためにも祈ってください。²⁰ わたしはこの福音の使者として鎖につながれていますが、それでも、語るべきことは大胆に話せるように、祈ってください。

教会讃美歌 165番「いともとうとき」1,2,4節、172番「つくりぬしを」1,2,5節、181番「ここにいます」1,2,3節、260番「主イエス・キリストよ」1,2,4節、198番「主よめぐみもて」1,2,6節